

デリバティブ論

第 5 回 確率解析のレビュー (その 2)

岩城 秀樹

京都大学大学院経営管理研究部

October 31, 2018

定義 (1)

- ① 離散的確率変数 (X, Y) において, X と Y が独立であるとは

$$\Pr[X = x_i, Y = y_j] = \Pr[X = x_i] \Pr[Y = y_j]$$

がすべての x_i と y_j について成立することである.

- ② 連続的確率変数 (X, Y) において, X と Y が独立であるとは

$$f(x, y) = f_X(x) f_Y(y)$$

がすべての x と y について成立することである.

定義 (2)

多変量の確率変数の独立性も 2 変量の場合の自然な拡張として定義される。すなわち、 n 個の離散的な確率変数 X_1, \dots, X_n が独立であるとは、

$$\Pr[X_1 = x_1, \dots, X_n = x_n] = \prod_{i=1}^n \Pr[X_i = x_i]$$

がすべての x_1, \dots, x_n について成立することである。連続的な確率変数の独立性も同様である。

定理 (1)

X_1, \dots, X_n を独立で同一の確率分布に従う確率変数の列とし,
 $X = \sum_{i=1}^n X_i$ とする. このとき,

$$X_i \sim Be(p) \Rightarrow X \sim B(n, P).$$

定理 (2)

X と Y が独立ならば

$$m_{X+Y}(s) = m_X(s)m_Y(s).$$

定理 (3)

X と Y が独立ならば

$$\mathbb{E}[XY] = \mathbb{E}[X]\mathbb{E}[Y].$$

注 (1)

定理 3 の逆は一般に成立しない (例 1 参照). しかし, X と Y が正規分布ならば逆も成立する.

例 (1)

2 変量確率変数 (X, Y) の確率分布が下表のように与えられているとする.

		Y の実現値		X の周辺分布
		0	1	
X の実現値	-1	$\frac{1}{3}$	0	$\frac{1}{3}$
	0	0	$\frac{1}{3}$	$\frac{1}{3}$
	1	$\frac{1}{3}$	0	$\frac{1}{3}$
Y の周辺分布		$\frac{2}{3}$	$\frac{1}{3}$	

このとき, $\text{Cov}(X, Y) = 0$, すなわち無相関であるが,

$$\Pr(X = -1, Y = 0) = \frac{1}{3} \neq \Pr(X = -1) \Pr(Y = 0) = \frac{1}{3} \times \frac{2}{3},$$

$$\Pr(X = -1, Y = 1) = 0 \neq \Pr(X = -1) \Pr(Y = 1) = \frac{1}{3} \times \frac{1}{3},$$

$$\Pr(X = 0, Y = 0) = 0 \neq \Pr(X = 0) \Pr(Y = 0) = \frac{1}{3} \times \frac{2}{3},$$

$$\Pr(X = 0, Y = 1) = \frac{1}{3} \neq \Pr(X = 0) \Pr(Y = 1) = \frac{1}{3} \times \frac{1}{3},$$

$$\Pr(X = 1, Y = 0) = \frac{1}{3} \neq \Pr(X = 1) \Pr(Y = 0) = \frac{1}{3} \times \frac{2}{3},$$

$$\Pr(X = 1, Y = 1) = \frac{1}{3} \neq \Pr(X = 1) \Pr(Y = 1) = \frac{1}{3} \times \frac{1}{3}.$$

すなわち, X と Y は独立ではない.

□

例 (2) (2次元正規分布)

$$\boldsymbol{\mu} := (\mu_1, \mu_2)^\top, \quad \boldsymbol{\Sigma} := \begin{pmatrix} \sigma_{11} & \sigma_{12} \\ \sigma_{21} & \sigma_{22} \end{pmatrix}$$

として $\mathbf{X} := (X_1, X_2)$ の同時確率密度関数 $f(\mathbf{x})$ が

$$f(\mathbf{x}) = (2\pi)^{-1} |\boldsymbol{\Sigma}^{-1}|^{\frac{1}{2}} \exp \left\{ \frac{-(\mathbf{x} - \boldsymbol{\mu})^\top \boldsymbol{\Sigma}^{-1} (\mathbf{x} - \boldsymbol{\mu})}{2} \right\},$$
$$\mathbf{x} := (x_1, x_2)^\top \in \mathbb{R}^2$$

を満たすとき, \mathbf{X} は平均ベクトル $\boldsymbol{\mu}$, 共分散行列 $\boldsymbol{\Sigma}$ の **2次元正規分布** に従うという. □

定理 (4)

$f(\mathbf{x}; \boldsymbol{\mu}, \boldsymbol{\Sigma})$ を平均ベクトル $\boldsymbol{\mu}$, 共分散行列 $\boldsymbol{\Sigma}$ の 2 次元正規分布に従う確率変数の確率密度関数とする.

このとき $\boldsymbol{\lambda} := (\lambda_1, \lambda_2)^\top \in \mathbb{R}^2$ に対して

$$e^{\boldsymbol{\lambda}^\top \mathbf{x}} f(\mathbf{x}; \boldsymbol{\mu}, \boldsymbol{\Sigma}) = e^{\boldsymbol{\lambda}^\top \boldsymbol{\mu} + \frac{1}{2} \boldsymbol{\lambda}^\top \boldsymbol{\Sigma} \boldsymbol{\lambda}} f(\mathbf{x}; \boldsymbol{\mu} + \boldsymbol{\Sigma} \boldsymbol{\lambda}, \boldsymbol{\Sigma}), \quad \mathbf{x} \in \mathbb{R}^2.$$

注 (2)

2次元正規分布の定義において $X, \mathbf{x}, \boldsymbol{\mu}, \boldsymbol{\Sigma}$ を n 次元とすることによって, $n, n \geq 2$, 次元正規分布を定義できる. 同様に定理 4 も n 次元へ一般化できる.

定義 (3)

2つの事象 A と B に対して, B のもとでの A の条件付き確率を

$$P(A|B) := \frac{P(A \cap B)}{P(B)} \quad (1)$$

で定義する. ただし, $P(B) > 0$.

(1) より

$$P(A \cap B) = P(B)P(A|B)$$

が成立する. これを乗法公式と呼ぶ.

条件付き分布と条件付き期待値 II

全事象 Ω が事象列 A_1, A_2, \dots によって分割されている。すなわち

$$\Omega = A_1 \cup A_2 \cup \dots, \quad A_i \cap A_j = \emptyset$$

とする。このとき,

$$P(B) = \sum_{i=1}^{\infty} P(A_i)P(B|A_i) \quad (2)$$

が成立する。これを**全確率の公式**と呼ぶ。

条件付き分布と条件付き期待値 III

2変量確率変数 (X, Y) は離散的とする. 事象 $\{Y = y_j\}$ のもとでの X の条件付き確率は, (1) より

$$\Pr[X = x_i | Y = y_j] := \frac{\Pr[X = x_i, Y = y_j]}{\Pr[Y = y_j]}.$$

ただし, $\Pr[Y = y_j] > 0$.

注 (3)

$$\sum_{i=1}^{\infty} \Pr[X = x_i | Y = y_j] = 1$$

$\therefore \Pr[X = x_i | Y = y_j]$ は x_i に関して確率分布.

条件付き分布と条件付き期待値 IV

(X, Y) が連続型の場合には, 事象 $\{Y = y\}$ のもとでの X の条件付き密度関数

$$f(x|y) := \frac{f(x, y)}{f_Y(y)}$$

を考える.

注 (4)

$$\int_{-\infty}^{\infty} f(x|y) dx = \frac{\int_{-\infty}^{\infty} f(x, y) dx}{f_Y(y)} = \frac{f_Y(y)}{f_Y(y)} = 1$$

$\therefore f(x|y)$ が x に関して密度関数.

定義 (4)

$\{Y = y\}$ という条件の下での X の条件付き期待値を

$$\mathbb{E}[X|Y = y] := \begin{cases} \sum_{i=1}^{\infty} x_i \Pr[X = x_i|Y = y], & (X, Y) \text{ が離散的} \\ \int_{-\infty}^{\infty} x f(x|y) dx, & (X, Y) \text{ が連続的} \end{cases} \quad (3)$$

で定義する.

(3) より $\mathbb{E}[X|Y = y]$ は y の関数と考えられるので, y の値を明示する必要の無い場合には, $\mathbb{E}[X|Y = y]$ を $\mathbb{E}[X|Y]$ と書く.

定理 (5)(条件付き確率における全確率の公式)

$$\mathbb{E}[X] = \mathbb{E}[\mathbb{E}[X|Y]].$$

定義 (5)

非負の実数の集合 \mathcal{T} は時点の集合を表すとする。
関数 $X : \mathcal{T} \times \Omega \rightarrow \mathbb{R}$ において

$$X(t, \cdot) : \Omega \rightarrow \mathbb{R}, \quad \forall t \in \mathcal{T}$$

が確率変数となっているとき、 X を**確率過程**あるいは単に**過程**と呼ぶ。

$X(t, \omega)$ は状態 $\omega \in \Omega$ が生じたときの時点 $t \in \mathcal{T}$ における実現値。
 $X(t, \cdot) : \Omega \rightarrow \mathbb{R}$ を $X(t)$ と略記。

定義 (6)

確率過程 X がすべての時点 $t \in \mathcal{T}$ において $\mathbb{E}[|X(t)|] < \infty$ ならば X は**可積分**であるという。

以下、確率過程 X に対して \mathcal{F}_t , $t \in \mathcal{T}$, を $\{\omega \in \Omega : a < X(s) \leq b\}$, $a, b \in \mathbb{R}$, $s \in [0, t]$, を含む最小の事象の集合とする.

定義 (7)

可積分な確率過程 X が

$$\mathbb{E}[X(s) | \mathcal{F}_t] = X(t) \quad \forall s > t, s, t \in \mathcal{T}$$

を満たすとき X はマルチンゲール.

以下, $T \in \mathbb{R}$ を所与として $\mathcal{T} = [0, T]$ とする.

定義 (8)

次の (1)~(3) によって定義される確率過程 $\{W(t) : t \in \mathcal{T}\}$ を標準ブラウン運動またはウィーナー過程と呼ぶ.

- ① $\Pr[W(0) = 0] = 1$.
- ② (正規増分性) $s > t \geq 0$ となる時点 $s, t \in \mathcal{T}$ に対して,
 $W(s) - W(t)$ は平均 0, 分散 $s - t$ の正規分布に従う.
- ③ (独立増分性) $0 \leq t_0 < t_1 < \dots < t_n$ となる時点 $t_i \in \mathcal{T}$, $i = 0, 1, \dots, n$ に対して,
 $W(t_0), W(t_1) - W(t_0), \dots, W(t_n) - W(t_{n-1})$ は互いに独立.

定数 μ と σ に対して $X(t) = \mu t + \sigma W(t)$, $t \in \mathcal{T}$ によって定義される確率過程 $\{X(t) : t \in \mathcal{T}\}$ をドリフト係数 μ , 拡散係数 σ のブラウン運動と呼ぶ.

定義 (9)

\mathcal{T} を $\{(t_0, t_1], (t_1, t_2], \dots, (t_{k-1}, t_k]\}$, $t_0 = 0$, $t_k = T$ というように適当に小分割したとき,

$$\theta(t) = \theta(t_i), \quad t \in (t_{i-1}, t_i], \quad i = 1, 2, \dots, k$$

となる確率過程 $\{\theta(t) : t \in \mathcal{T}\}$ を **単純過程** という。

単純過程 $\theta := \{\theta(t) : t \in \mathcal{T}\}$ に対して θ の $\{W(t) : t \in \mathcal{T}\}$ による **確率積分** $\int_0^t \theta(s) dW(s)$, $t \in \mathcal{T}$, を次で定義。

$$\begin{aligned} & \int_0^t \theta(s) dW(s) \\ & := \sum_{i=0}^{n-1} \theta(t_{i+1}) [W(t_{i+1}) - W(t_i)] + \theta(t_{n+1}) [W(t) - W(t_n)]. \end{aligned}$$

定理 (6)

$\mathbb{E} \left[\int_0^T \theta(t)^2 dt \right] < \infty$ となる任意の $\{\theta(t) : t \in \mathcal{T}\}$ に対して

$$\mathbb{E} \left[\int_0^t (\theta_n(s) - \theta(s))^2 ds \right] \rightarrow 0 \quad (n \rightarrow \infty), \quad t \in \mathcal{T}$$

となる単純過程の列 $\{\theta_n(t) : t \in \mathcal{T}, n = 1, 2, \dots\}$ が存在し、その列 $\{\theta_n(t) : t \in \mathcal{T}, n = 1, 2, \dots\}$ に対して

$$\mathbb{E} \left[\left(\int_0^t \theta_n(s) dW(s) - Y(t) \right)^2 \right] \rightarrow 0 \quad (n \rightarrow \infty), \quad t \in \mathcal{T}$$

となる確率過程 $\{Y(t) : t \in \mathcal{T}\}$ が唯一存在する。

定義 (10)

定理 6 の $\{Y(t) : t \in \mathcal{T}\}$ を $\{\theta(t) : t \in \mathcal{T}\}$ の $\{W(t) : t \in \mathcal{T}\}$ による**確率積分**と定義し, $Y(t)$ を $\int_0^t \theta(s) dW(s)$ と表記. □

定理 (7)

- $\{\int_0^t \theta(s) dW(s) : t \in \mathcal{T}\}$ はマルチンゲール.
- $\mathbb{E}[\int_0^t \theta(s) dW(s)] = 0$.
- $\mathbb{E}[\int_0^t \theta_1(s) dW(s) \int_0^t \theta_2(s) dW(s)] = \int_0^t \mathbb{E}[\theta_1(s)\theta_2(s)] ds, t \in \mathcal{T}$.

定義 (11)

$\{\mu(t) : t \in \mathcal{T}\}$ を t によって積分可能, $\{\sigma(t) : t \in \mathcal{T}\}$ を $\{W(t) : t \in \mathcal{T}\}$ によって確率積分可能とする. このとき,

$$S(t) = S(0) + \int_0^t \mu(s)ds + \int_0^t \sigma(s)dW(s), \quad t \in \mathcal{T}. \quad (4)$$

で定義される $\{S(t) : t \in \mathcal{T}\}$ を伊藤過程と呼ぶ.

(4) において μ をドリフト関数, σ を拡散関数と呼ぶ. (4) は, 形式的に

$$dS(t) = \mu(t)dt + \sigma(t)dW(t), \quad t \in \mathcal{T}$$

と表記される.

$\{\theta(t)\mu(t) : t \in \mathcal{T}\}$ を t で積分可能, $\{\theta(t)\sigma(t) : t \in \mathcal{T}\}$ を $\{W(t) : t \in \mathcal{T}\}$ によって確率積分可能とする.

$\{\theta(t) : t \in \mathcal{T}\}$ の伊藤過程 $\{S(t) : t \in \mathcal{T}\}$ による確率積分 $\int_0^t \theta(s)dS(s)$, $t \in \mathcal{T}$, を

$$\int_0^t \theta(s)dS(s) := \int_0^t \theta(s)\mu(s)ds + \int_0^t \theta(s)\sigma(s)dW(s), \quad t \in \mathcal{T}$$

で定義. 定義から $\{\int_0^t \theta(s)dS(s) : t \in \mathcal{T}\}$ も伊藤過程.

テイラー展開

定理 (8)(テイラー展開)

関数 $f(x)$ が $n + 1$ 回まで微分可能ならば

$$f(x+h) = f(x) + f'(x)h + \frac{f''(x)}{2!}h^2 + \cdots + \frac{f^{(n)}(x)}{n!}h^n + o(h^n)$$

テイラー展開の式は、多変数関数にも拡張できる。2変数関数 $f(x, t)$ が2次の連続な偏導関数をもつならば、

$$f(x+h, t+k) \approx f(x, t) + f_x(x, t)h + f_t(x, t)k + \frac{f_{xx}(x, t)h^2 + 2f_{xt}(x, t)hk + f_{tt}(x, t)k^2}{2!}.$$

ただし、下付きの添え字は、偏導関数を表わす。

定理 (9)(伊藤公式)

$\{X(t) : t \in \mathcal{T}\}$ を

$$dX(t) = \mu(t)dt + \sigma(t)dW(t), \quad t \in \mathcal{T}$$

という伊藤過程とする. 関数 $f(t, x)$, $f : [0, \infty) \times \mathbb{R} \rightarrow \mathbb{R}$, が t に関して連続微分可能, x に関して2階連続微分可能ならば,
 $Y(t) := f(t, X(t))$ と置くと,

$$\begin{aligned} dY(t) &= \frac{\partial f}{\partial t}(t, X(t))dt + \frac{\partial f}{\partial x}(t, X(t))dX(t) + \frac{1}{2} \frac{\partial^2 f}{\partial x^2}(t, X(t))(dX(t))^2 \\ &= \left(\frac{\partial f}{\partial t}(t, X(t)) + \frac{\partial f}{\partial x}(t, X(t))\mu(t) + \frac{1}{2} \frac{\partial^2 f}{\partial x^2}(t, X(t))\sigma(t)^2 \right) dt \\ &\quad + \frac{\partial f}{\partial x}(t, X(t))\sigma(t)dW(t) \end{aligned}$$

となり, $\{Y(t) : t \in \mathcal{T}\}$ も伊藤過程.

注 (5)

$$\begin{aligned}(dX(t))^2 &= (\mu(t)dt + \sigma(t)dW(t))^2 \\ &= \mu(t)^2 dt^2 + 2\mu(t)\sigma(t)dW(t) + \sigma(t)^2 dW(t)^2 \\ &= \sigma(t)^2 dt.\end{aligned}$$

$$\therefore dW(t)^2 = dt.$$

定理 (10)(ギルサノフの定理)

η を定数として,

$$\xi(t) := \exp\left(\eta W(t) - \frac{1}{2}\eta^2 t\right), \quad t \in \mathcal{T}$$

とする. このとき, 確率変数 $\xi(T)$ は正, かつ $\mathbb{E}[\xi(T)] = 1$ であるから,

$$Q(\mathcal{A}) := \mathbb{E}[\xi(T)1_{\{\mathcal{A}\}}], \quad \mathcal{A} \in \mathcal{F} \quad (5)$$

とすると, Q は Ω 上の確率となる. さらに

$$\hat{W}(t) = W(t) - \eta t, \quad t \in \mathcal{T}$$

によって定義される \hat{W} は確率 Q の下で標準ブラウン運動.

はじめに、確率 Q の下で $\widehat{W}(t)$, $t \in \mathcal{T}$, が平均 0, 分散 t の正規分布に従うことを示す.

$\widehat{W}(t)$ の確率測度 Q の下での積率母関数を求める. $\lambda \in \mathbb{R}$ とすると

$$\begin{aligned}
 & \mathbb{E}^Q \left[e^{\lambda \widehat{W}(t)} \right] \\
 &= \mathbb{E} \left[e^{\lambda \widehat{W}(t)} \xi(T) \right] \\
 &= \mathbb{E} \left[e^{\lambda(W(t) - \eta t)} \times e^{\eta W(T) - \frac{1}{2} \eta^2 T} \right] \\
 &= e^{-\lambda \eta t - \frac{1}{2} \eta^2 T} \mathbb{E} \left[e^{\lambda W(t) + \eta W(T)} \right].
 \end{aligned}$$

ギルサノフの定理の証明 II

標準ブラウン運動の定義にある (b), (c) の性質より,

$$\begin{aligned}\text{Cov}[W(t), W(T)] &= \text{Cov}[W(t), W(T) - W(t) + W(t)] \\ &= \mathbb{V}(W(t)) = t\end{aligned}$$

となるから, $(W(t), W(T))^{\top}$ は

$$\text{平均ベクトル } \mathbf{0} := (0, 0)^{\top}, \quad \text{共分散行列 } \Sigma := \begin{pmatrix} t & t \\ t & T \end{pmatrix}$$

の2次元正規分布に従っている.

$\therefore N_2(x, y; \mathbf{0}, \Sigma)$ をこの正規分布の分布関数とすると

$$\mathbb{E}^{\mathbb{Q}} \left[e^{\lambda \hat{W}(t)} \right] = e^{-\lambda \eta t - \frac{1}{2} \eta^2 T} \int_{-\infty}^{\infty} \int_{-\infty}^{\infty} e^{\lambda x + \eta y} dN_2(x, y; \mathbf{0}, \Sigma).$$

$\boldsymbol{\lambda} := (\lambda, \eta)^\top$ とすると定理 4 より

$$\begin{aligned} & \int_{-\infty}^{\infty} \int_{-\infty}^{\infty} e^{\lambda x + \eta y} dN_2(x, y; \mathbf{0}, \boldsymbol{\Sigma}) \\ &= e^{\frac{1}{2} \boldsymbol{\lambda}^\top \boldsymbol{\Sigma} \boldsymbol{\lambda}} \int_{-\infty}^{\infty} \int_{-\infty}^{\infty} dN_2(x, y; \boldsymbol{\Sigma} \boldsymbol{\lambda}, \boldsymbol{\Sigma}) \\ &= e^{\frac{1}{2} \boldsymbol{\lambda}^\top \boldsymbol{\Sigma} \boldsymbol{\lambda}}, \end{aligned}$$

$$\boldsymbol{\lambda}^\top \boldsymbol{\Sigma} \boldsymbol{\lambda} = \lambda^2 t + 2\lambda\eta t + \eta^2 T.$$

$$\therefore \mathbb{E}^Q \left[e^{\lambda \widehat{W}(t)} \right] = e^{\frac{1}{2} \lambda^2 t}. \quad (6)$$

積率母関数の一意性から確率 Q の下で $\widehat{W}(t)$, $t \in \mathcal{T}$, は平均 0, 分散 t の正規分布に従う。

ギルサノフの定理の証明 IV

次に、独立増分性を示す.

$T \geq t_2 \geq t_1 \geq s_2 \geq s_1 \geq 0$ として

$$\begin{aligned}\widehat{W}(t_2) - \widehat{W}(t_1) &\equiv W(t_2) - W(t_1) - \eta(t_2 - t_1) \\ &\stackrel{d}{=} W(t) - \eta t, \quad t := t_2 - t_1,\end{aligned}$$

$$\begin{aligned}\widehat{W}(s_2) - \widehat{W}(s_1) &\equiv W(s_2) - W(s_1) - \eta(s_2 - s_1) \\ &\stackrel{d}{=} W(s) - \eta s, \quad s := s_2 - s_1,\end{aligned}$$

$$\log \xi(T) = \eta W(T) - \frac{1}{2} \eta^2 T,$$

$$X := W(t) - \eta t, \quad Y := W(s) - \eta s, \quad Z := \log \xi(T)$$

とおくと,

$$\begin{aligned}\mathbb{E}^Q \left[e^{\lambda(\widehat{W}(t_2) - \widehat{W}(t_1)) + (\widehat{W}(s_2) - \widehat{W}(s_1)))} \right] &= \mathbb{E} \left[e^{\lambda(X+Y)} \xi(T) \right] \\ &= \mathbb{E} \left[e^{\lambda X + \lambda Y + Z} \right]\end{aligned}$$

ギルサノフの定理の証明 V

(X, Y, Z) は平均ベクトル $\boldsymbol{\mu}$, 分散共分散行列 $\boldsymbol{\Sigma}$ が

$$\boldsymbol{\mu} = \left(-\eta t, -\eta s, -\frac{1}{2}\eta^2 T \right)^\top, \quad \boldsymbol{\Sigma} = \begin{pmatrix} t & 0 & \eta t \\ 0 & s & \eta s \\ \eta t & \eta s & \eta^2 T \end{pmatrix}$$

の正規分布に従うから, $\boldsymbol{\lambda} := (\lambda, \lambda, 1)^\top$ とおくと定理 4 より,

$$\begin{aligned} & \mathbb{E} [e^{\lambda X + \lambda Y + Z}] \\ &= \int_{-\infty}^{\infty} \int_{-\infty}^{\infty} \int_{-\infty}^{\infty} e^{\boldsymbol{\lambda}^\top \mathbf{x}} f(\mathbf{x}; \boldsymbol{\mu}, \boldsymbol{\Sigma}) dx dy dz \\ &= e^{\boldsymbol{\lambda}^\top \boldsymbol{\mu} + \frac{1}{2} \boldsymbol{\lambda}^\top \boldsymbol{\Sigma} \boldsymbol{\lambda}} \int_{-\infty}^{\infty} \int_{-\infty}^{\infty} \int_{-\infty}^{\infty} f(\mathbf{x}; \boldsymbol{\mu} + \boldsymbol{\Sigma} \boldsymbol{\lambda}, \boldsymbol{\Sigma}) dx dy dz \\ &= e^{\boldsymbol{\lambda}^\top \boldsymbol{\mu} + \frac{1}{2} \boldsymbol{\lambda}^\top \boldsymbol{\Sigma} \boldsymbol{\lambda}} \\ &= \exp \left(\frac{1}{2} \lambda^2 t + \frac{1}{2} \lambda^2 s \right). \end{aligned}$$

さらに, (6) から

$$\mathbb{E} \left[e^{\lambda X + \lambda Y + Z} \right] = \mathbb{E}^{\mathbb{Q}} \left[e^{\lambda \hat{W}(t)} \right] \mathbb{E}^{\mathbb{Q}} \left[e^{\lambda \hat{W}(s)} \right],$$

$$\begin{aligned} \therefore & \mathbb{E}^{\mathbb{Q}} \left[e^{\lambda(\hat{W}(t_2) - \hat{W}(t_1)) + (\hat{W}(s_2) - \hat{W}(s_1))} \right] \\ &= \mathbb{E}^{\mathbb{Q}} \left[e^{\lambda(\hat{W}(t_2) - \hat{W}(t_1))} \right] \mathbb{E}^{\mathbb{Q}} \left[e^{\lambda(\hat{W}(s_2) - \hat{W}(s_1))} \right]. \end{aligned}$$

\therefore 定理 3 と注 1 より独立増分性が示せた.

□

問題 I

問題 1 $Z := \{Z(t); t \geq 0\}$ を $(Z(t) \sim N(0, \sigma^2 t))$ のブラウン運動とする。このとき、以下の各問に答えよ。

問 1-1 $t > 0, s > 0$ に対して、

$$\text{Cov}[z(t), z(s)] = \sigma^2 \min\{t, s\}$$

を示しなさい。

問 1-2 $s > t > 0$ に対して、

$$\rho[z(t), z(s)] = \sqrt{\frac{t}{s}}$$

を示しなさい。ただし ρ は相関係数を表す。

問 1-3 Z はマルチンゲールであることを示しなさい。

問題 II

問 1-4 $\{Z(t)^2 - \sigma^2 t; t \geq 0\}$ はマルチンゲールであることを示しなさい。

問 1-5 θ を定数とすると, $\{\exp(\theta Z(t) - \frac{1}{2}\theta^2 \sigma^2 t); t \geq 0\}$ はマルチンゲールであることを示しなさい。

問題 2 次の関数を $x = 0$ でテイラー展開することにより, 次が成立することを確認しなさい。

① $\log(1 + x) = x + \frac{1}{2}x^2 + \frac{1}{3}x^3 + \dots$

② $e^{\theta x} = 1 + \theta x + \frac{1}{2!}\theta^2 x^2 + \frac{1}{3!}\theta^3 x^3 + \dots$

ただし θ は定数とする。

問題 III

問題 3 次の伊藤過程を考える.

$$\begin{aligned}dX(t) &= \mu_x X(t)dt + \sigma_x X(t)dW(t), \\dY(t) &= \mu_y Y(t)dt + \sigma_y Y(t)dW(t), \quad t \geq 0.\end{aligned}$$

ただし $\{W(t); t \geq 0\}$ は標準ブラウン運動, μ_i, σ_i , $i = x, y$, は定数とする. このとき, 次の各問に答えなさい.

- 問 3-1 $f(X(t), Y(t)) = X(t)Y(t)$ として, 確率微分 df を伊藤の公式を用いて導出しなさい.
- 問 3-2 $f(X(t), Y(t)) = \frac{X(t)}{Y(t)}$ として, 確率微分 df を伊藤の公式を用いて導出しなさい.

問題 4 次の伊藤過程を考える.

$$dX(t) = \mu X(t)dt + \sigma X(t)dW(t), \quad t \geq 0.$$

ただし $\{W(t); t \geq 0\}$ は標準ブラウン運動, μ と σ は定数である. このとき, $f(X(t)) := \log X(t)$ として, 確率微分 df を伊藤の公式を用いて導出しなさい.